

として、学校に講堂という施設が加わるには至りません。全校生徒が一堂に集える講堂のない学校は、雪隠(便所)のない家のようなものです。校長が講話をしたり、全校で弁論会を開いたり、合唱したり、また、雨天でものびのびと体操したりできる場のない学校は、学校とは申せません。そこで、早急に、何としても蓼科農学校に講堂を設ける算段をして、今、盛んに運動をしている次第です。つきましては、大臣に、その講堂の正面に掲額する書を揮毫していただきたいのです。」

渡辺は、五無齋の人を食った比喩に思わずにんまりした。蓋し、にんまりとほくそ笑んだのは、五無齋一流の諧謔精神だけが理由ではない。昨秋から昼夜奔走していても、実際はまだ影も形もない講堂の建設計画に、まずもって、文字通り郷土の傑物のお墨付きをいただき、県や郡村行政当局への無言の催促とする五無齋らしい私利私欲のない目論見を察して、痛快を覚えたのである。

6年前の五無齋の押しかけ訪問のその日から頗る意気投合した、この教育一途な男の頼みは、よほどの無理難題でもない限り応ずる腹積もりの渡辺は、穏やかな微笑みを浮かべながらも、既に揮毫の意を固め、書に臨む気を充たしていた。無垢なる教育的情熱と実業家的な手腕

を併せ持ち、教育に関わる一大事業を次々に成し遂げていくこの破天荒な男を寵愛して止まない渡辺国武は、今までも物心両面の援助を惜しまなかった。

東京帝国大学教授、神保博士の知己を得て、同大学地質学教室に出入りしていた五無齋の研究活動費の支援……。

日本の国情及び欧米諸国の様子、教育事情の講義、そして、深夜に及ぶ談論風発……。

寒中、コート代わりに身にまとい、五無齋のトレードマークになった舶来の赤ゲット(赤い毛布)の贈与……。

書齋に移った子爵が、揮毫の気が漲るのを感じ、五無齋を促した。

「何と書くのだ。」

「この絹本に、蓼科学校、信濃図書館、と書いていただきたい。」と、五無齋が持参の大絹本を、4畳ほどの黒い毛氈の上に広げた。

子爵は、書生三人にすらせた大量の墨を高箒のような羊毛筆にたっぷり含ませ、一気に呵成に書き上げた。

五無齋は、揮毫の謝礼に鬃毛の長鋒筆一本を残し、渡辺子爵邸を颯爽と辞した。

この日、いかなる渡辺国武でも、4年後の明治44年6月7日、誕生した日の前日に、まさかこの屈強な偉丈夫、五無齋

が、隠居の我が身よりも先に逝くとは知る由もなかった。

そして、その翌年、長野市西長野にある加茂神社境内の隣接地に建立された記念碑の碑文「五無齋保科百助碑」を書くことになるのは……。

郎が読んだ。「講堂のなき不自由さは、雪隠のなき家にも等し。」と聞き、参列者一同、破顔一笑し、郷土が輩出した偉大な教育者を偲んだ。

昭和39年10月16日、蓼科高校全面改築の落成式の折、「蓼科学校」の大額面が新体育館に掲額され、今も蓼科高生の学びの姿を悠然と見守っている。



蓼科高校体育館の扁額「蓼科学校」

渡辺正武子爵邸を訪れた翌日、上京時の定宿、本郷「旭館」を発った五無齋は、自ら「火の車」と名付けた朱塗り金箔付きの荷車を牽きながら、足早に牛込区岩戸町に向かった。

この年、不惑を迎えた五無齋の胸は、かの渡辺国武元大蔵・通信大臣に比肩する若き俊傑に直面する喜びと期待と緊張で少年のようにときめいていた。

他日、五無齋は、渡辺国武が「蓼科学校」と大書した書絹地4葉を、北佐久郡横鳥村の知人、吉村源太郎に送った。そして、五無齋没後11年経た大正11年10月16日、蓼科農学校の講堂が落成し、縦1メートル、横3・2メートルの大額面に納められた渡辺国武の書が講堂の正面に掲げられた。落成式の折、五無齋の遺言を吉村源太

いと断じた五無齋の風体と派手やかな荷車の取り合わせは、道行く人を振り返らせた。しかし、人の好きな視線など一向意に介さぬ五無齋は、同じ北佐久郡の川西に生まれ、後に、「現代書道の父」と称された比田井天来(1872〜1939)に思いを巡らしていた。